

莖面  
サ微  
の園

# 華面サ微の園

アンストルーサア夫妻は、エセツクス州

にあり、ウエストフィールド・ホールの

居間  
~~多々園~~

で、朝食をとつてらん。二人は、その日のプ

ランをよみてつた。

曰ねえ、ジョージ。と、アンストルーサ

ア夫人は言つた。曰わたし、あやしがマルド

ンまで、馬車で行らしたほろがらうと思ひ

まさしく、<sup>わたし</sup>の今いつた <sup>ようす</sup>編み物 ~~類~~

~~類~~を手に入れることか、できるか、やつとみ

て頂きたいの。それで、~~書~~わたし、<sup>ハガ</sup>慈恵市

<sup>わたしの</sup>の陳列室を飾りたいの。

ロイ、マリー。お読みをい、

無論出かけるよ。だが今朝は、ジエフリ・サリ

ラム <sup>ス</sup>ン君と、  
~~「ラウンド」~~ <sup>「ゴルフ競技の」</sup> <sup>「い」とまわり</sup>

やろくと思つて、支度しおけるとこなんだ。

<sup>ハガ</sup>慈恵市は、来週の木曜 <sup>まで</sup> ~~後~~りやあつた

よ。そなたろく？

可それがあられにちうりまをの？ ショーシ。わ

たし、マルドンでほしいものを、手に入れ

れなかつたら、<sup>あの</sup>町中の店という店へ、手紙を

出さなくちやあつないくらい、察してくだす

つてもいいと思ひますわ。しめも、その店は、

はじめつめら、値段も過剰と、まづちくちく

入らないうものを送つてくるにまづつています

わ。ほんところ、~~井~~井リアムスンさんとお約束

あすつたのあら、さうなるさるぬい<sup>たい</sup>わ。だけ

ど、もつと早くあらうらうらうと換きたのつたわ。山

異行一字

「ああ、いやいや、ほんとうに約束したん  
 じゃないよ。あかっているよ。行くよ。で、お  
 前は一人でなれさすのだい？」

「まあ。うちの仕事か片がいたら、あたし、  
 新規な美術の園を設計しなくてやります

せん。あなた、アルドンへお出掛けの前、

ついでに、あたしがきめておいた場所を見せ  
 り、<sup>(下田の)</sup>コリンズを連れて行って頂きたいわ。待

たいますわね。無言。

「いや、はつきりは知らないよ。村のほう」

の、上手ウツクシのはしだったか？

「あら、ちいさな書カキますわ。わたし、よく

お教おしえをきいてたと思っていましたに。——い

いえ、教おし室むろのはうへいく薩さつ海かい木き林りんの道みちから、

ちよつとはなれぬあのちいさな園園地ちですわ。（内二）

別行一字りり

「おお、そうだ。あの、前（前）にはまつと涼（涼）亭（亭）

があつたにちいさいと、二人でまつてた、

あそこだぬ。榎榎杵杵ちん腰腰掛掛と榎榎杭杭のあるとこ

だぬ。だぬ、あそこは、日日あたりかいいか

た？

「あ、あなた。わたしだつてすこしは常識さよ  
失礼ね。」

「で、つ、ま、ま、わ。涼亭<sup>まき</sup>なにか思い出しなぐらい

のあやうくの考えて、わたしを信用して頂きた

くは、ま、あ。ええ、むろん日<sup>ひ</sup>老はたつぷり

あたりまゝとも。あの義<sup>ぎ</sup>り<sup>り</sup>を取<sup>と</sup>りのければね。  
<sup>黄<sup>わう</sup>楊<sup>やう</sup>の</sup>

あ、ま、ま、御有<sup>ご</sup>ろ<sup>ろ</sup>とすゝことは、あ、あ、つてい

ま、ま、わ。だからわたし、あ、あ、~~は~~<sup>に</sup>あ、あ、ことを裸

々切きはらつて、さ、い、あ、あ、こ、お、解<sup>と</sup>け、しま

せんわ。わたし<sup>ただ</sup>コリンズ、一時間たつてわ

たし、如<sup>ごと</sup>く、前<sup>まへ</sup>へ、腰掛<sup>こし</sup>や杖<sup>つゑ</sup>やそのほ、あ、あ、ものとき、

すっかり取り揃ってしまいましたのですわ。そ

してあそびには、すぐ出かけて頂きたいの。

ランチョン  
向食「朝食と昼食」のあとで、わんし、教

室の ~~夏の間をききまをききま~~ スケツをしようと思ひますの。だ

から、まあそのあいた、あそびはゴルフ・リン

クにおいでね。すつてよろしいでしよう。』

別行一字リッ

曰や、そいつはくまのそえだ ~~ききまのききま~~ ー ちつた

く！ いやあ、お前は ~~夏の間をききま~~ けさかく ぷい。

そのあいた、一ラウンドやってまよる。』

曰 ああ、まねさん ~~ききまのききま~~ におききま ~~ききまのききま~~ したる。あそび



思うんだけど——だけど、あの方の行状見を

きいたところで、わたしの<sup>徐</sup>鬱鬱はは、お人の

たしにも足りませぬわ。さあ、早くお支度な

さいよ。でないと、午前中の車分は遅延してし

まうまうよよ。

アンストルーガー<sup>氏</sup>の顔は、~~物憂~~ほぐ

れるように見えたり、まぐつと固くあった。

いそいで部屋を出たが、すぐ廊下できんか合

りこいた聲が聞える。アンストルーガー夫人は、

みれられ五十歳ははなろうといふ、  
<sup>おま</sup>おま<sup>た</sup>た<sup>る</sup> <sup>おま</sup>おま<sup>た</sup>た<sup>る</sup>

あつた  
あつた  
あつた

君を愛する者ありては、

主婦ぶりて、朝暮書翰の書翰に二度目を通し

たあり、家事を處理しはじめた。

ニ三合つちひ、アンストルーガー氏は、

温室でユリンスをえつけん。二人は、計書を

多量の葉巻の計書と書かれたり、場竹

へ連れ出つた。業者は、こんを樹苗床に、  
ナースリイ

もつとも適しといふ条件については、

多くを知らずい。だが、  
多量の葉巻の偉大なる  
つねに

花  
作り、たか自認して  
いふにても、アンス

トルーガー夫人が、目的に對する好適の地を



のたと、  
~~アンストル~~ アンストルーザア氏 <sup>は</sup> 推測したわけだ

つた。

コリンズは、この土地についての夫人の計

画を、<sup>べつ</sup> ~~書き~~ ちんとも思つてはいちか

た。で、アンストルーザア氏から、その話を

聞かされた時にも、平氣な顔をしてゐた。

曰ええ、すぐ、すつかり腰掛を之か取り揚

つ <sup>ち</sup> ~~き~~ ようしましたよ。と、彼は言つた。曰く

んやものは、ここの飾り <sup>へ</sup> ~~も~~ <sup>は</sup> ありませぬし、

ま、ひどく腐つちまつてますからね。と

んまさい。と、大きな木片をぶちろあしなが  
ら、口すつり腐りかきあつてまさあ。え  
え、手もなく取っ拂えまうよ。と

口すつり 杖も 雲坂かきくちはな。と、パン  
ストルーザ氏は言つた。

コ  
リングスは仕事をつおけた。両手で杖をゆ  
すおつた。途端に頭をすり割つた。

口すつり、地がたに、しつかと喰いこんで  
まじと。と、彼は言つた。口すつりは、夜が半、

ここにあつた人ですよ、旦那。お美し、腰掛

のように、かいそれと撥取つ拂えないうよう  
で。

「だが、奥さんは、どうでも一時間のうち  
に除けてほしいと言つてゐるのだよ」と、ア  
ンストルーサー氏は言つた。

コリンズは、羨しく笑つて、ゆつくり頭を  
振つた。「駄目ですよ。旦那だつておあがり

でしよ。誰だつて、できぬものはできぬ  
えんでさ。ねえ、そうでしよ？ まあお茶ちや

時とき [午後] まだに振きましよう。● うんと振

うなうちやぢりません。早御やおつしやうま

は、<sup>（書き直し）</sup> まあ、<sup>（4つと）</sup> 教習とあるを言わしと頂け

うさう、<sup>（つまり）</sup> この杖のぐりりの土を、ゆるめるこ

とよんで <sup>（さあ）</sup> ~~まま~~ <sup>く</sup> それはわたしと悴で、すこ

しの<sup>（ま）</sup> 働けばいいんで ~~ま~~ <sup>ま</sup> よ。だが、こ

こりあるくの腰掛でさぬ。と、ユリンスは、

自分の工夫力 <sup>（い）</sup>、~~ま~~ <sup>ま</sup> 葦藪 ~~（ま）~~ <sup>ま</sup> の計畫のこ

の部分に ~~（ま）~~ <sup>ま</sup> 適用するよう見せかけ ~~（ま）~~ <sup>ま</sup>

う言った。曰これにはまあ、おまかせくたさる。

あうら、<sup>（みえ）</sup> 冊 ~~（ま）~~ <sup>ま</sup> をくぐって、<sup>（みえ）</sup> 取っ ~~（ま）~~ <sup>ま</sup> 拂いませう。今から





説明す

よしよー

ああ、さうさ。だ、こいつ等をすし

取り除けてしまふんだ。

ヨリやあ、たしめん、取っ掛いさえすり

やあね！ ええ、たぶん、さうすりやあです

のーねえ、旦那ー

ヨしめんがさ、コリンズ。わしは今、

乗って行かなくちゃあつない。乗口 馬車

まあようだ。奥さん、何の事か

とを言ふだろう。わしは、奥さんいふ言つてお

ころ。お前が、腰掛はすぐ取り除けるが、枕  
は午後でないと駄目だつてことをね。じゃあ、  
それでは。ト

コリンズは、頭をさすりちのら続つた。そ  
こへ来たアンストール・ザア夫人は、主人の言  
葉をきいて石満らしかつた。だが、~~多量~~プランを  
多少喜ぶことには、~~多量~~のれこれ  
言わなかつた。

その日の午後四時まで、夫人は善良人おとこをゴ  
ルフへ遣つた。コリンズをくまなくあしらい、  
~~い、~~

その日のほけの勤めも、きつくとやつくのけ  
 た。そしてきめた場所へ、キャンポ椅子と日  
 より傘をとたしこやつて、海木林から 目ざれ  
 教室の貝取園にとりめめた。そとへ女中  
 が、急ぎ足り道をおりてきて、井ルキンス  
 嬢が、訪ねて来られたと知らせた。

井ルキンス嬢は、二三年前、アンストルー

サア夫妻が、ウエストフィールドの地所を買

った か この 家族の一人だった。彼女は、今を

地所の直ぐれとどまつてつたのであるが、こ

これは最後の別れの訪問らしかった。

「井ルキンスさん、ここでお目んぬみり

なさい

つて、お別れなさい。はい。

お別れ

と、アンストルーパー夫人は言った。すく、

井ルキンス嬢は、やつて来た。もういつはし

な年齢の女性だった。

「ええ、明日ここを出発しよ」と思ひながら

の。わたらし、是れ、あやういお別れなさい

の土地

を、どんちゃんからりとお別れなすったか、話

してやりましょ。無論是は、  
こころに建つて

以前

いた、あのちいさな家を、惜しいことだと

しむでしよーあたしたつて、そうですけ

園花園のひまわり

れどく、~~園花園のひまわり~~は、ほんとに嬢

しうどおらまはあ。E

口そー言つて強けは、あり強いですわ。で

も、まぶまぶ、改良の終つたとお考えをすつ

るはりけませへ。

とくへ、~~園花園のひまわり~~をふる。

め、ごらんに入れましょ。ついでに近くだ

すのE

設計書の細目か、井ルキンス嬢の前か

別行一宇リケ

長くひろげられた。だが、嬢は、あまのめん、  
ほみの<sup>場所</sup>を考えてい<sup>た</sup>ようだった。

曰ええ、結構ですわ。と、侍女はひろげ

つり<sup>うしろ</sup>に言っただけ、曰でも、<sup>おわりのひし</sup>

<sup>う。</sup>わたし<sup>うしろ</sup> ~~あまのめん~~ なんだか、あまのめんを考えて

いましたわ。あたし、あまのめんが手をお入れに

をつたへたり、<sup>この</sup>姿を、もう一度見とくと

おいまをわ。<sup>弟の</sup>フランクとあたしは、この場所

に、あまのめんの思い出があつたのですわ。と

曰<sup>ほ</sup>、と、アunistルーサー夫人は、<sup>ほ</sup>











した。その晩中、おどおどしていて、まるで  
眠りませんでした。おたまたまのおぼえさう

おきりでは、彼のそむい顔の寝が番さうな

ければ、あふなるおつたのでした。向もなく、彼

は、よくなりました、<sup>けれど</sup>二三日の間、わた

しは、どろどろそんな状態になつたのか、

彼から聞き出すことはできませんでした。

とろとろあつたことは、彼か<sup>はんとん</sup>ベンチで眠つ

て、實にふしあな、とりとめもない夢を見た

といふことでした。彼は、決して自分のぐすり  
その話のすりまうと、

れあつたものを、見たのでちう、その光景を  
も、ほんとうに生き生きと感じたのでした。

はじめ、彼は、多勢の人のいる大きな部屋  
にまつていたのでした。そして彼知に向き合  
つていた人はいかにも強さうな人で、彼

は、その人から、いかにも重大だと感じられ  
るような数々の質問を、しあげられたので

した。で、彼の質問に答へる事を躊躇ためらう

毎日、誰か——彼と向き合つてゐる人か、そ

のほめの人かか——~~誰か~~あんなごとき、彼知の  
友

去<sup>レ</sup>年<sup>ノ</sup>くから、か  
すの<sup>レ</sup>御<sup>レ</sup>書<sup>レ</sup>を  
ま<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>ので

對<sup>シ</sup>す、よろい思<sup>ハ</sup>われたそ<sup>レ</sup>でせ。どの聲<sup>ト</sup>

みなずいふん あまのつらさ しんか、徳<sup>ト</sup>

それさすこしはやりはおほえこいましん。お

前は十月十九日には、どこれいふか?とか

「この筆<sup>ト</sup>跡<sup>ト</sup>はお前のか?」とかいふたことを

おたくしは、徳<sup>ト</sup>、おろん裁判<sup>ト</sup>をうけた<sup>レ</sup>を

思<sup>ハ</sup>ふのだと、今<sup>レ</sup>でもそ<sup>レ</sup>思<sup>ハ</sup>います。ひすけれ

ど、その書類<sup>ト</sup>があるわけではなし、そ<sup>レ</sup>と、

ソノノ八<sup>ノ</sup>歳<sup>ノ</sup>だつたフランクが、法廷<sup>ト</sup>で行われ

たことを、そん<sup>ノ</sup>あんな<sup>ノ</sup>いきいきとおほえこ<sup>レ</sup>いた

ちんて、ふしきでしたわ。彼の話では、いさ後同

おつと、心痛と壓迫と絶望大変な——こんな言

葉をいさ使ったとは思いませんけれど——威

いたというのでした。それから、しばらくは、

彼はいさおそろしくおどおどして、しおれ切つて

いたのでしたか、いさこんどはまた別の光景あ

りました。彼は自分か、戸口から、いさ暗

くろびところ雪のあ、暗い、あけきらない

夜身明けの中へ踏み出したこといさあま

ん。それは街だったか、とひかく、いさ家の縁

ている場所、彼は、それにもまう多勢の人  
 が、~~あ~~ることを感じました。そして、かえり  
 がギシギシ軋む階段をのぼりされ、ひろい堂  
 の上へ立たされたのでした。~~そのほろりとした~~

を、~~そのほろりとした~~ついでかくに、ちいさな火が  
 燃えているのだけが、はつきり見えました。

すると、~~彼の~~他の手をつかんでいた誰かが、その  
 手を放し、美少女のほうへ行きました。彼の

話では、ここが夢の中で、一層恐ろしいもの  
 だったのだそうで、もしわたしが揺り起さ

まかつたら、自分はどうもったわあからよ  
と、言うことでした。子どもは夢は、  
妙<sup>奇</sup>な夢ではなかつたでしょう？ ええ、い

かれも奇妙な夢ですわ。——その年の、夏

じかくだったと思ひます。フランクとわたし

しは、ここで遊んでいました。あたくしは、

ちようと<sup>タカ</sup>、涼亭<sup>せん</sup>の中で腰あけていま

した。お日さまの落<sup>は</sup>た<sup>い</sup>たので、わたし

はフランクに、かうちでお茶の支度ができ

いるの見てまてくさい、その向い、讀みか





でしん。

湖行一字サヤ

さやをさよ 井ルキン ス嬢は話をつおけて

湖行一字サヤ

おたのめ知ら恐ろしくそつて、あたしは

痛むおぬりまへん。 聲は——ささやきよりも、

とつと小さかつたうですけれど——いかりも

しやかれた、  
おたのめをさよ  
おたのめをさよ  
おたのめをさよ 御者まへをもつてい

ました。——のれ遠い遠いあちらから——ちよ

うとフランク<sup>か</sup>の<sup>か</sup>中で囀ったように——<sup>南</sup>

<sup>え</sup>あまをさよるのでしん。 でし、ひつくりはし

ましたけれど、あたしは<sup>しつかり</sup>雪の氣を出して、あた



ません ~~おれ~~。そう、どれがあの棒つ杭だつ  
 たか……おか、それでしよ。そ<sup>の上</sup>に、  
 いや搔き痕がありますわ。——でも、一つは  
 わかりませへわ。とでもかく、アンストル  
 ーガアの奥さま。あやうかいらつーやふ、そ  
 のそこの棒つ杭と、まったく同じでしたわ。  
 あたしの父は、フランクとあたしの、~~涼~~  
~~亭~~で怖<sup>おそ</sup>い目に会つたことを知りました。そ  
 うして父は、ある日の夕飯<sup>夕食</sup>のあと、自分でこ  
 こへ下りて来て、急に<sup>急に</sup>涼亭<sup>涼亭</sup>を板<sup>板</sup>き倒し<sup>倒し</sup>

旦那

しまいました。おん、その時のこと

い出しましたわ。父はここ、臨時雇いの使

旦那さんと話をしつています。父は旦那は、

そのことをおれに言いたつていいですか。あいつ

はここへん中ね、しつかと押へられてますわ。

誰とあいつをよそへ移したり、おれに知らせた

りし、<sup>おん</sup>ね。"と言います。おん、

そのおれに死か訊いたのびすけれど、<sup>おん</sup>

やに返事されただけ。きつと、おん、<sup>大</sup>

人、父より母よりから、<sup>おつとくわしい</sup>



あの涼亭は、一時、わたし達のわやみの氣

になつてゐるものでしたわ。 奥をきき、こ

くしん、わたし達の が勝手にあとをきき 揃

えんお 話 き、お氣に召しましたか知ら。

—では、アンストルーガアの奥さま。もう

お暇いたさなうそは存じませぬ。この冬、こ

の町 冬をきき でお目見のりたものでち

わね。』

こうして、井ルキンス嬢は、去つた。

腰掛と杖と、 その方までいはいは、 すっかり取り除かれ引き抜かれ

てしまつた。夏過ぎんとする天候は、  
誰か ~~悪寒~~

つてゐるよりは、  
健康からだエ合ははよくな

かつた。そのせいか、夕食の時、コリンズの

おぢみさんがやつて来て、フランデーをさそ

し頂きたつといつた。コリンズがなといとあつ悪寒

はおぢみあれといふので、明日はうんと働くこと

かできまうといふのだつた。

お三朝 アンストルーサー夫人の 目おの ~~悪寒~~は、

福か まくを ~~悪寒~~ はちあつた。彼女は、昨夜、な

にか悪く奴が、あの植附サ地へはいり込んだ







僕は

きつと——ええ、きつと昨夜、あたしは ~~見た~~ <sup>見た</sup>

と同じ ~~場所~~ <sup>場所</sup> へ来たのよ。 ~~あそこ~~ <sup>あそこ</sup> はあ

の扉でもないクラブ・ハウスで、お茶をおあが

りなつたでしょ？ どろ？ じ

コッパヤ。お茶を一杯と、バタをつけたパ

ンをよこしロハ入れた。 ~~お茶~~ <sup>お茶</sup> どうして ~~僕~~ <sup>僕の</sup>

君が ~~お茶~~ <sup>お茶</sup> を飲んだの、知りたかったのだ。

—— ~~僕~~ <sup>僕</sup> は、見たり ~~話~~ <sup>話</sup> したりしたたかさんの小

さなまから、 ~~僕~~ <sup>僕</sup> が ~~話~~ <sup>話</sup> してきあゆるんだと思つ

てつんだが ~~ね~~ <sup>ね</sup>。ね、メリイ、嫌でなければ

向か <sup>いそ</sup> <sub>いそ</sub> といひぬ——

曰どんな夢だつたか、ぜひ向かへて頂きたいわ。

すつかりお聞きしん上で、わたしの夢

もお話ししますわ。

曰では話そう。あの夢は <sup>夢</sup> <sub>夢</sub> 夢、ほめ

悪夢 <sup>おそろ</sup> <sub>おそろ</sub> とはちかつかつていたよ。と言ふのは、夢の

中で僕は話しわけたり <sup>あ</sup> <sub>あ</sub> 解つたりした者を、 <sup>ほ</sup> <sub>ほ</sub> 話

も僕は <sup>見</sup> <sub>見</sub> 見ることができたんだし、

しかも、僕はその事実 <sup>ま</sup> <sub>ま</sub>、實に恐ろしく記

憶してゐるんだからぬ。——はじめ僕は腰か

けていた。いや、あゝきまわつていた。そこ

は、なんでも古風な、鏡板のはめこんである。

却屋だった。おぼえていたが、そこには煙の

あつて、その中にたくさん紙がくべてあつた。

さうして僕は、なんだか知らないが、紙幣は不

安な氣持でいた。すると、<sup>ほめ</sup>言ひ——下男だつ

たと思ふが、僕はそいつに、<sup>ほめ</sup>「馬だ。びまゝ。

だけ早く」と言いつけたよろ~~い~~におぼえてい

る。さうしてちよつと待つていた。つかいて僕

は、五人の男が、階段をのぼつて来る<sup>足</sup>三層を



ほの部屋と同じに

壁でかゝるきれいな大きな部屋にいた。鏡板をは

めこんだ部屋を夢だつたと思ふ。たぐさ人

ゐいた。そして僕はたぐさ人——

何を言ふは、訊くにまねきれたのでしよう

? ショーショー

お夢見! そうだよ、メリイ。お前も

まじり夢を見たのね! どうもふしぎじ

やないの! じ

コワイえ。わたしは、夢をよく眠つていな

かつたので、そんな場面は見えなくてわ。

その場の様子では、

おつと話ししてごらん下さい。わたしはあとで  
お話ししようから。」

「さうだね。では言うか、僕は訊問されて

いたんだよ。<sup>ウケテ</sup>生半げのりあることだったにち

のいであつた。誰か僕のたぬい辯護士をくれ

者はあつた。そして、どこのそのあたり

に、ほんとうに恐ろしいやつか——ベンチ

にすりのあつてつた。それには字に不分明に  
<sup>僕はさうか、</sup>

僕の言つてあつた。おれは答えるこ

と僕は、みんな曲解してあつて、まづよく言



去道断を訊問を行おうとしゃべるんだ。

「どのまことを？」

「僕はどこその場所に行ったという日記を

訊いたり、僕が書いたと思われず筆蹟手紙の

ことを聞いたり、まじやで僕が或る書類を破

つたかと思ふたおねたりするのだ。思い出す

か、そのつは僕が、どうも<sup>か</sup>筆蹟を答えると、

<sup>へんにいふ</sup>  
~~筆蹟を答へるんだ。~~ <sup>か</sup>筆蹟を答へると、  
その時僕はまづたく<sup>か</sup>筆

揃してしまつた。筆蹟の聲は高きはなつ

た。たか、マリイ、筆蹟それはその時は、

實に <sup>清く</sup> 夢を見ておつたよ。僕は確信するが、ああ

した奴は、嘗てあんなにわがにちぬいてない。

そして、もつとも思ふべき悪當にたつたにち

ぬいてない。そいつぬ言つたことは——」

「おありおとろ。 ~~夢を見て~~ <sup>は仰有か</sup> それ ~~夢を見て~~ <sup>夢を見て</sup> ない

でも ~~いい~~ いいわ。あたし、いつの自分でゴルブリ

ンク ~~へ~~ <sup>ついで</sup> 行 ~~ま~~ <sup>ま</sup> まで ~~わ~~ <sup>わ</sup>。で、夢は、どんなふ

うにおしまいいんちりましたの？」

「おうむ。僕 ~~は~~ <sup>北有をわけ</sup> ~~夢を見て~~ <sup>その方</sup> ね。そいつは ~~夢を見て~~ <sup>夢を見て</sup> を

見たんだ。 ~~夢を見て~~ <sup>夢を見て</sup> そのあとで起つた ~~夢を見て~~ <sup>夢を見て</sup> 有

様はどい同りてもかいたい。僕は数日同り

續くよりに思われるんだ。僕は待ちに待った。

そして時々、僕に<sup>とて</sup>  
<sup>思われ</sup>常々<sup>の</sup>重大だと<sup>思われ</sup>

ことを書いた。そして返事を待ったが、誰の

来りもなかった。それから僕はそとへ出た——

「あ、——」

「まあ、だつて？　お前は、僕が見えんこと

かあ？　のあ？　」

「それは暗い寒い日で、街には雪があつた

でしよう？　そしてあんなのどくの近くで、

火が燃えてたでしょう？

「やッ！ その通りだ！ お前も同じ悪世おとられ」

を見たんだ！ ほんとれそらろろ？ うむ。

なるともふしぎ千幕だ！ —— そうだ。僕は

たしかに <sup>大逆無道</sup> 殺されて死にたのたと思

うよ。僕は <sup>世の上の</sup> 悪者か悪者かと思つた。そし

て、あさみしくも <sup>揺り蒸き</sup> 殺された。そ

れから <sup>あまの</sup> ぼろのぼろ

らなかつた。誰か僕の腕をつかんでいら

僕は <sup>はり</sup> ちよつと梯子を見たと <sup>か</sup> 驚かされた。

ガヤガヤする聲を聞いたと思ふ。僕は、その

群集の中をを通りぬけてゆき、彼等の話して

いる聲を聞く<sup>たけの我腹がびびる</sup>とは實とても奇

えられまい。だが、幸い、その堂縁が事實に

到らないうで済んだ。夢は僕の頭の中で、雷の

ようなとどろきともれ、消えてしまつた。だ

め、メリイール

「あなたがおきこくとくらくやくとくは、

カ  
おぼろげな夢のりまを。わたし、これを「鐘

の護心術の例だと思ひまゐるの。#ルキンスさ

人が昨日わたしにお別れを言いに来られまし

たの。そしてここに僕んでいた子ども時分、

弟さんが変な夢を見たといかう話をきかれました。

昨夜あ ~~ま~~ たしん、あの恐ろしい鳥の聲で目を

さました時、そしてあの人達の森木林の中で

がやがや笑つていた時（ついでに言いますと、

あの ~~夢~~ 人達があのあそこを荒しはしなりました

か、あそこを見ても聞きなさいの。 そこのところ

とを教習室に届けを頂きたいの、 あんなに

か、わたし、井ルキンスさんのお話を、 手紙

まゝではいられませんでした。だから、その

の頭の中

ゆたし ~~を~~ 考えへ、眠つていらつゝやるあつた

に傳わつたにちぬいまいと思ひまゐる。ほん

とくれふしきでよ。 ~~あつた~~ その わたし、 か 眠るあつた

あつたをきつめたことを、お説教しよるわ。あ

ちうは今日、 きく びきりだけ新鮮な空の氣 に 触

れよさるのいいでよるわ。

曰いせ、今はもうすつめりいよ。だん、

ロケット

僕は小屋へ行くと思つて。誰かとゴルフをや

つてみよつて。で、お前はと ~~あつた~~ する

お...

「わたし、手の中はしなればなりのまいた

と、<sup>つぶや</sup>たうまき。手後は、羞し文

このうち限り、<sup>スケッチを</sup>思ひまはす。

「さうだね。——できたらせみ見せてもら

うたい。

それで話はすんだね、漆木林の中は、べ

つれをんか着されはいたね。アンスト

ルーサー氏は、美術園の場所を、けんの意味

を換分した。そこは、ひき抜かれた杭が、



投げ出されたままになってた。その穴の跡  
 も、そのままになってた。コリンズの様子  
 さきいてくれたら、やや元氣はなつた、ま  
 が仕事に出かけることは、とてできなかつた  
 とおわかつた。コリンズは、おめめさんの口  
 を通じて、自分の枕を取り揚つたところ、ま  
 りかあやまちをあげたところ、身がないう  
 りでいふと云つた。おめめさんはさきに  
 言葉を添へて、ウエストフィールドには、  
 たくせんのおしやべり屋さんかい<sup>た</sup>が、たち

のわらうのは、頑固な連中だと言った。お

かみさんには、ほめの人よりもおつと長く、こ

の教区にいろそくした連中の、いろんなこと

を考へて、<sup>だつ</sup>よろしくお考えな。だが、彼等の

<sup>誤</sup>義理とところを綜合しても、コリンズをま

つたく攪乱した事實以上お考えを、おしめめ

ることはできなかつた。彼等のまじうともな

とは、ほとんど義理でもない、<sup>ナシセンス</sup>義理なきだつた。

一行のり

<sup>ランチ</sup>間食と小時間の睡眠とで氣力を恢復した

アンストルーガー夫人は、例の瀧木林から、

教舎の基礎の側内が見えちやう道に畫橋を

<sup>四角</sup>、心地よく腰を拆えた。あちりの樹々

や建物は、夫人の好畫題だつた。で、こゝで

夫人はこの二つをえ方<sup>研究</sup>觀察<sup>太陽</sup>した。夫人

は制作に没頭した。繪畫<sup>太陽</sup>が西のこんも

りした丘に遠ざられる頃まで觀察<sup>制作することは、</sup>をせよと

考へてみれば、空れたのしいこととあつた。たつた。

夫人は、<sup>日光</sup>あまか精出<sup>妻</sup>して仕事した。だが、

はズンズン暗くなつたので、あまは仕上げの事

は、どうしてと明日といふことゝなつた。し

はらく、西の空の澄み切つた緑を驚き鑑賞し

まゆらみと息入れて、夫人は立ちあがり、家

のほうへ<sup>聲を返えし</sup>振身返りなつた。それから<sup>つげ</sup>黄楊の花

を通りぬけ、芝の上へ出る道の前まで来た

時、まゆ足まとめり、静のな夕暮の<sup>風</sup>星をいっ

と<sup>眺め</sup>見た。そよそクツキリと空に区切られた<sup>そのは、</sup>教

舎の一つの塔にちいさいと、心りとめら。

その時、一羽の鳥(他分そつたつらう)が、

左手の<sup>つげ</sup>黄楊の花の中で、かさが音をた<sup>て</sup>て



は、正確に、~~いつと~~ <sup>いつと</sup> 考えおれはいられまい

らの正確に、その口がどんぞんぱくつと開い

こいたか、たつた一本の歯が、~~上~~ <sup>上</sup> ~~唇~~ <sup>唇</sup> ~~裏~~ <sup>裏</sup> ~~裏~~ <sup>裏</sup>

こいたかを知った。夫人に見られて、その顔

は、羨りの暗がりへスツとみつこんだ。——夢

中へ走って、夫人は家へ飛びこんだ。ドアを

しめると、へたへたとなつてしまった。

アントルーサー夫妻は、一週向々上、ブラ

イトンで休養した。そこで彼は、エセック

ス考古学会から、~~書~~ 回章を受取った。それらは

彼等がそれの歴史的な肖像画を所蔵しては  
 しないかという、訊きあわせだつた。もし所  
 蔵のすれば、学令の保護のもとに出返さるべ  
 き、エセックス肖像画集の、来るべき計畫に  
 加えたいからというのだつた。左が、学令の  
 秘書からの手紙の添え紙であつて、つぎのよう  
 な文句の書かれどつた。

ロンドン大学に於ては、こゝに封<sup>同</sup>致し置き候

寫眞の原版を、貴下が御所蔵せらるるにあら

ちやと、特に期待致し居候。伊達の如く、この

人物××卿は、チャールス二世下の最高法院

長にて、貴下が必らおや御承知の如く、その

失権後、ウエストフィールドに隠退し、  
(慚愧) 痛恨

のあまり逝去せられたりと想あるる人物は有

之候。現時、この珍らしき記録が、ウエスト

フィールドにあらわしてプライベート・シンクの

登記簿より発見せられし事は、貴下にも (味)

(是感也) 是と存じ候。 (その結果) 在人物の死

後、お返は甚だしく (困却し) ウエストフィー

ルドを教込長は、すべてルーシングスの傳を



この事件のまっ

掲載し、この人物を供養致し候。発見せられ

た記録の末尾には、  
「<sup>（西方）</sup> 杭はウエストロフイー

ルド教多基地は隣接せる野にあり」ところさ

れ候り候。貴下の教区に行われある、この事

實に同する。口碑伝説を、御知らせなすあらん

期待は  
にはと 舊候。

ところで、この「同封された写真」を<sup>（見ます）</sup>見

アンストルーガP夫人は、<sup>（シヨワリ）</sup> 猛烈な衝撃をう

けた。そのため、夫人は、この冬<sup>（冬）</sup> 外国旅行

しななければならぬことになつた。

アンストルーヴァ氏は、所定の整理をする。

ため、ウエストフィールドに帰った。その時、

氏は、当然、一人の老教区長に、今までの話

をうちあげた。この老教区長は、<sup>ほとんど</sup> ~~おまかせ~~ <sup>おまかせ</sup> 部

きの色をあのあさなかつた。彼は言った。

曰、実は、わたしも、この <sup>言葉</sup> ~~言葉~~ <sup>の助け</sup> については、

自分でいろいろまとめましたので、半は土

地の古老に聞き、半は <sup>自分である</sup> ~~おまかせ~~ <sup>おまかせ</sup> たちの所有地

を探索したのです。無論、わたし達も、お

る程度、苦しめられたのです。そくです。

他の晩には

はじめの頃は、いけなかつたです。あやしの

お話のよう、鳥のようなもの●や、人々の

しゃべる聲の時々しづか。しかも夜は眠れ

は、この園のいりかと思えば、<sup>おまわり</sup>おまわり

あたら<sup>あたら</sup>あたらをうろつくのでさ。たぬ、<sup>近頃</sup>近頃は、さつ

ぱり見かけなくちりました。それでわたしは、

い、あれがすつかり<sup>おまわり</sup>おまわりを<sup>おまわり</sup>おまわり

す。過去帳のほかに、<sup>おまわり</sup>おまわりを<sup>おまわり</sup>おまわり

<sup>おまわり</sup>おまわり<sup>おまわり</sup>おまわり<sup>おまわり</sup>おまわり

えていたもののほかに、おまわりのおまわり

の家訓

ません。ですが、よく調べてみて、ところどころ

後、~~人の~~手で書まがえられたものだ

というところに気がつきました。そこには、十

七世紀中に物部一、~~老~~教区長の頭文字

があるのでした。A.C. — 一ツチリ アウガス

・クロントンというぬ。こゝれその家

訓があらまゝ。どらんたゝ。 — *quieta non*

*movere*. (静のなきもの、動のすなわ

れ)で、わたしは思うのですが — ええ、

ことは、どうもまあもつたしい

細くつらつても、それを正確に言います。